

# 藝文

第貳拾貳年 第壹號

## 我大和語の構造

大 島 正 健

我國語には一音一語の者其數多し。エ(江)、キ(木)、ス(醋)、テ(手)、ナ(名)、ヒ(日)、ヨ(夜)の如し。更に又二音以上連なりて、一語を爲す者は、其の大多數を占む。ハナ(花)、ユキ(雪)、ハシラ(柱)、コロモ(衣)、タハムレ(戯)、ヨロコビ(喜)、カキツバタ(杜若)、ツバクラメ(燕)の如し。此等の者には分析して一音毎に即時に其意味を知り得べき者あり、又容易く知り得べからざる者あり。數語相結びて、ミモト(身許)、ハタガシラ(旗頭)、アヲウナバラ(青海原)など、爲り、更に新語を生ずるは、國語の特徴にして、膠着性を帶ぶるものとす。支那語は一音一語にして、連続に熟語として用ゐらるゝ主要なる者は、二語若しくは三語に過ぎず。是れ國語と支那語と、其根本に於いて、構造の異なる所なり。此處に國語を連続

系支那語を單音系と稱するは、只單に大體を指して言ふことにして、其上かゝる分別は、既に幾多の變遷を経て、發展し來れる、双方の現代語には、精確には該當し難き所あるべきは、豫期する所なり。

國語の構造に就いて考ふるに、必ずしも其原始の形を單音語に歸すべきものに非ず。二音以上の者の、合して成りたる者を以て、原好語と見做すべき場合もあるべし。又連続にて組成せられたる語の、部分部分に就いて探り見れば、其意義の一々明瞭なる者あり、又中には不明瞭なる者あり。其の不明瞭なる者に對して、語根を正すに、困難を感ずることの多かるべきは言ふまでも無し。單音語は、之を語根と稱すべき要無けれども、其儘語根の形として、取り扱ふことを得べし。單純なる複音語の、其意義を、表はす、主要なる部分と、之を補助する附屬の部分とより成る者を取りて、其構造を示すべし。其の主要なる部分を、之を語根と稱し、其語根を助長又制限する附屬の部分にして、其上に添はるときは、之を接頭語或は單に語頭と稱し、其下に添はるときは、之を接尾語或は單に語尾と稱す。此語尾は國語の構造に於いて重要なる役を務む。左に二三の例を擧ぐ。

ハシは名詞の形にて橋なり。ハムルは動詞の形にて笹なり。兩語に通ずる主要

なる部分のハは、間といふ義を有する語根なり。シは名詞語尾にして、ムルは動詞語尾なり。

ミナ(皆)といふ名詞と、ミツル(充)といふ動詞とを對すれば、兩語に通ずる主要な部分のミは實の義を有する語根なり。ナは名詞語尾、ツルは動詞語尾なり。

トキは形容詞にして鋭なり。トグは動詞にして磨なり。兩語に通ずる主要なる部分のトは語根なり。キは形容詞語尾にして、グは動詞語尾なり。

國語の構造につき、細密なる分析を試むるときは、語根、語頭、語尾の關係、容易に分ち難く、むつかしき問題を惹き起すことあり。

名詞の上に他の名詞又動詞形容詞の連なりて出來上がりたる熟語は單音語の如き獨立語なるが故、直接に語根には關係を有せず。春風、山鳥は名詞と名詞との連語なり、釣舟、着物は動詞と名詞との連語なり。荒物、黒雲は形容詞と名詞との連語なり。連語即ち熟語は、下の名詞其意重きを爲し、其上に來る名詞は屢々形容詞の意に轉せんとする傾向を生じ、其母音を變へて、下に接することあり。カネモノ(金物)をカナモノ、ナツキダチ(夏木立)をナツコダチといふが如し。

名詞の上に来る形容詞にして、其義を存すれども、獨立語として、其形を保つこと能

はざる者は、之を語頭に編入す、即ち形容語頭なり。ウヒジン(初陣)のウヒ、ハツシモ(初霜)のハツ、オミ(臣)のオ、ヲダ(小田)のヲ即ち是れなり。既に此等の諸語に語頭の名を用ゐる以上は、之に準じて下の名詞に語根の名を命ずること自然の順序なるべし、列記したる語頭の類は、當初は皆獨立語なるべかりしこと疑無し。ウヒ(初)は今は語頭なるが、ウヒウヒシキといふときは、獨立したる形容詞と爲る。ウヒの本義は生日にて、生まれたる日と言ふことなり。ハツ(初)も今は語頭なれど、是れがハツなりといふが如く、用ゐらるゝときは、獨立の名詞と爲る。ハツ(初)とハラ(果)とは、兩極端を差していふ語なり。オトナ(大人)はオツナの轉なるべし。オは大、ツは之、ナは人の義にして、オトナは大之人と爲る。當初は三音各獨立語なりしなり。是れヲトコ(男)をヲノコ(雄之子)と言ふに類す、これも亦ヲツコの轉なりとす。オミナは老女にしてヲミナは少女なり。兩者の三音皆意味ある獨立語なりしなり。オは老、ヲは少、ミは女、ナは人の義なり。古意にては、ヲトコ(少男)、ヲトメ(少女)は、小ツ子、小ツ女の轉なりしこと、人の知る所なり。即ちヲトコ、ヲトメは小之子、小之女の轉にして、獨立したる三語の相接して、後一語と爲りたる例なり。コは男子にして、メは女子なり。例に擧げたるオミ(臣)は大身にして、ヲダは注の如し。

名詞の語尾には、明かに獨立語より轉じたる者あり。ハヤト(隼人のト、イテ(射手)のテの、ヒト(人の轉なるが如し。カミ(上)は上ノ身なり。シモ(下)のモ、トモ(友)のモ、ツマ(夫又妻のマは、ミ(身)の轉なるが語尾と爲る。カミ(上)、シモ(下)共に方向の義に轉じたるとき、ミもモも共に無意義の語尾と爲る。スミカ(任處)のカ、イツコ(何處)のコは、同一の獨立語より出でたるものなるべしと雖も、今は有意義の語尾と爲る。ソト(外)のト、オモテ(表)のテ、ウチ(内)のチ、ハタ(端)のダは皆同義なる語尾にして、音轉と見るべし。タヒ(鯛)、コヒ(鯉)のヒ、ウグヒス(鶯)、キギス(雉子)のス、メス(雌)、ヲス(雄)のス、カハツ(蛙)、ナマツ(鯰)のツは皆意義あるが如く見ゆれど、語尾として取り扱はる。ソラ(天)のラ、ウロ(空)のロ、アナ(穴)のナ、アサ(朝)のサ、キシ(岸)のシ、ナミダ(涙)のダは無意義なれど、構成語尾と爲り、語根を助けて、其意を完成す。

動詞形容詞の語尾は、國語の構造に於いて、更に重大なる任務を盡くす。單音語の語根となり、之に語尾を附して、直ちに動詞形容詞と爲る者あり。ミ(實)は其儘語根と爲り、語尾ツルを添へてミツル(充)といふ動詞を完成す。テ(手)は音を變じて語根トと爲り、之に語尾ルを添へて、トル(取)と爲り、メ(目)は音を變じて語根ミと爲り、之に語尾ルを添へてミル(見る)と爲りて、名詞より動詞に移る。ヒ(日)は語根と爲るとき、其音を轉

じて、ヘ、フ(經)と爲り、直ちに二段動詞の語尾を形づくることゝ爲る。ス(醋)は其儘語根と爲りて、スキ(酸)といふ形容詞を生ず。複音語にては、ヤド(宿)を語根又語幹として、之に語尾ルを添へたるヤドル(宿)あり、マクラを語根又語幹として、之に語尾クを添へたるマクラク(枕)あり。されど大多數の場合に於いては、語尾は語根を助けて語意を完成せしむる構造の用を爲す。ナは不完全に音の意を含むを、之にルとクとを添へてナル(鳴)ナク(啼)と爲し、ツは不完全に粘着の意を含むを、之にクとグとを添へて、ツク(着)ツグ(次)と爲して、語意を完成するは其例なり。

爰に國語の作成に於いて、名詞と動詞と、何れが先出なる可きかといふ、重要な問題あり。前に出だせる者には、名詞先出の例もあれど、是に由りて一概に他を推し難し。今左に一例として、スといふ音より出づる諸語を擧げて、此問題を考究すべし。

スは動きたる物の、落ち着く有様を示す意なることあり。これ語根なり。之に語尾のムを添ふれば、スムといふ動詞を生ず。此動詞は落ち着くといふ意の語を完成す。之を基として、同形にして別義なる三種の動詞出で来る。

其一、スム(濟)は動作の終りて、落ち着きたるなり。争がスム、仕拂がスムの如し。其二、スム(清)は上面の浮動物の降下し、水の濁り無く清くなりたるなり。清ム

は轉じて澄ムの義と爲り、月がスム、心がスムなどいふ。

ス(洲)は水瀬の落ち着きたるに由りて生じたる處をいふ。

ス(酔)は酒の浮動物の落ち着きて、清き液と爲りたるものなり。

其三、スム(住)は處を定めて落ち着きたるなり。

ス(巢)は鳥獸の住所なり。

名詞は先出にて之を語根と爲し、之に語尾を添へて、動詞を生ずるものなりと主張する者あり。此等の人々は前に擧げたる第三の例に於いて巢を基として、住ムの生じたるものとす。然るときは何故に巢にスの音を與ふるか、之を説明すべき責任を有す。スムは濟ム、清ム、住ムに共通する同根同尾の語なり。然るに此三語を互に關係無き、各自獨立の者と見做さざるを得ず。是れ謬見なるべきこと明かなり。

合理の解釋は次の如し。三語に共通するスは、落ち着くといふ空漠なる意を含める語根にして、未だ明確なる意義を有する名詞と稱すべきものに非ず。之にムといふ語尾の添はりて落ち着くといふ意を完成し、次いで濟ム、清ム、住ムの三種の觀念を表はす、明確なる意義を有する動詞を生せしなり。このムは構成語尾の職を務め、語根のスを助けて、動詞の意義を完成す。此等の動詞の意義は反つて語根に移り、語根

は更に名詞と爲り、第二の清ムの場合には洲と酢とを生じ、第三の住ムの場合には巢を生じたるなり。右の例にては、動詞先出にして、名詞後出なること言ふまでも無し。スは語根としては落ち着くといふ朦朧なる意義を有するに止まり、未だ完全なる語と稱すべきに非ず。之にムなる語尾の添はりて、完全なる動詞と爲り、而して其動詞の義を受けて、語根の獨立語と爲るとき、完全なる名詞と爲るなり。故に前に擧げたる巢は、住ムの意を受けて生じたる後出の語にて、住ムはこれが先出の語なり。若し此順序を顛倒することとせば、第二例に於いて、洲若しくは酢は先出にして、清ムは後出となる、奇怪なる結果に到着すべし。語根のスは、完全なる語とは稱し難しと雖も、濟ムにも、清ムにも、住ムにも、共通の義を含めるものなり。獨り住ムのみを切り離し、濟ム、清ムと沒交渉と爲すは、三者の縁故深き關係を見落としたるものなるべし。言語の作成に於いて、何れが先出なるか、後出なるかを判するは、其の異なりたる場合場合に由るべきなり。

語根と語頭語尾と、共に融化する屈折語と異なりて、國語には構成語尾の助を借らずして、獨立語を形成する者少からざることは、既に述べたるが如し。故に我國語の語根を探る方法は、印歐語の語根を探る方法と、根本より異なるべきものと思はる。



試に印歐語の法則に随つて、左の諸語を考査すべし。マク (maku) は捲なり。mak は語根にして、 $\alpha$  は語尾なり。マグル (maguru) は曲なり。mag は語根にして、 $\eta u$  は語尾なり。マフ (mahu) は舞なり。maf は語根にして、 $\alpha$  は語尾なり。マル (maru) は圓なり。mar は語根にして、 $\alpha$  は語尾なり。此等の不完全なる意義の語根が構成語尾の助に由りて、始めて其意義の明かなる獨立語と爲るなり。我國の學者に此方法を用ゐて國語を論ずる者あるを見れど、筆者は絶對に之に反對する者なり。Mak, mag, maf, mar 等は、我等の目には異様に見ゆる語根なり。又  $\alpha$  といふ音は、左様に構成力を有する者なりや否や、是亦甚だ疑はしく思はる。其は動詞の語尾に在りては、只活用を示すに過ぎざるべし。右の方法に従ふときは、上記の四語は皆其語根を異にし、其間に何等の交渉を有せざる獨立語と爲るなり。然るに其諸語に共通する主要なる部分のマ (ma) は圓の義にて、ク (ku), グル (guru), フ (fu) 及びル (ru) は、同根に附隨して、各別義を完うする、構成語尾として取り扱ふこと至當なるべし。

チャムパレーン氏は、其口語日本文典に於いて、日本語の構造を説明し、其例として困りマシタの kom-i-mashita を、次の如く分解せられたり。其語根を kom と爲し、之に語尾の  $\eta u$  を添へて、語幹の komar を生じ、之に  $\alpha$  を添へて komari と爲し、之に膠着語尾の

masu と過去語尾の *u* を加へて作り上げたることゝ爲る。即ち *kom + tari + mashi + ta* の四語より成立し、*kom* の外は *aru* (有ル) といふ意の語が、三度繰り返さるゝことゝ爲る。尊敬すべき大家の意見に對して異論を唱ふるは、事太だ僭越に屬すといへども、如何にせん其説明に承服すること能はざるを。コム(籠)は *komu* にて、コル(疑)の *koru* コキ(濃)の *koru* と、其主要なる部分の *ko* は、音義相通す。是れ語根なり。コムは籠の義より、込の義に移り、其他動詞はコムルと爲り、オシコムル(推込)ヤリコムル(遣込)の *komuru* といふ義を生ず。このコムルに對して、コマル(困)といふ自動詞更に現はれ來る。是はコムルの *komuru* にアルの *aru* を添へて *komaru* といふ形を取りたるに非ず。 *komuru* の *komu* の、其下の母音を *a* に移して *koma* といふ語幹即語基を生じ、之に語尾の *ru* を添へたるなり。此類の語基は、動詞の語幹と爲るのみならず、形容詞の語幹とも爲る例あるを見れば、*komar* の如き奇なる形の語幹を設けて説明すべきに非ず。アクル(明)の *akuru* に對して、アカル(明)の *akaru* と、アカキ(赤)の *akaki* 出で、セムル(賣)の *semuru* に對して、セマル(追)の *semaru* と、セマキ(狭)の *semaki* 出で、*ru* も、*ki* も共に語尾なるを知るべし。さてコムルの *komaru* に、ヤシの *mashi* と、テアリ即ち *teari* の融化したる *tari* の加はり而して下の *ri* 即ち *ri* の落ちたるなり。因つて *komarimashita* は *komaru* と

masu と tari の三語の結合なるを知るべし。語根の ko は、原生動詞の komu 又 komuru を生じたるが、派生動詞の komaru の中に含有せらる。語幹の koma に附く語尾の ru は、ヤドル(宿)即ち yadoru の ru, ウツル(移)即ち utsuru の ru と同格なり。

爰にナル(成)ナス(成)といふ二語あり。語根の na に英語の to be に當る ru と to do に當る ru との語尾を添へて自動形と他動形とを分てるなり。然るに之を nar と nas との相異なれる所の兩根と爲し、之に無意義の語尾の ro を加へて、兩語を作成したるものと爲す、見解に至りては、語尾に由りて自動他動を分つ、國語の妙用を破壊し去るものと謂ふべし。宿ル、宿ス、移ル、移ス、亂ル、亂ス、來ル、來ス等も、國語に普通なる同様の例なり。

又他動形を自動形に移すとき、定ムルより定マルに轉するが如きは、sadam に aru を加へて成れるものとして、説明することを得ば、自動形を他動形に移すとき、暮ルルより暮ラスに轉するが如きは、kur に asu を加へて成れるものとして、説明せざるを得ず。其の不合理なること論を要せざることにて、asu は實に意味を爲さず。前例は語幹の sadama に、語尾の ru を添へ、後例は語幹の kura に語尾の su を添へたるものとして、説明せば、語尾の ru と su とに由りて、自動と他動との活用を分つこと、其意義自ら

明瞭と爲るなり。後例の *kuira* の如きは、之に語尾の *ra* を添ふれば、*kuirara* といふ形容詞を生ず。*kuiraki* はクラキ(暗)なる以て *kuira* の正當なる語幹なるを知るべし。

語根に語尾を附したる原生語が、其語尾に於いて、母音變化を生じ、之に又新語尾を附して派生語を生ずるときは、其語尾の添はる本體の部分を、語幹又語基と稱す。語幹は語尾を附せずして、其儘名詞と爲ることあり。アルル(荒)は原生動詞なり。アラキ(荒)は派生形容詞なり。アラス(荒)は派生動詞なり。派生語に共通するアラは語幹又語基なり。アラは又粗惡の義にて名詞とも爲る。オクル(起)は原生動詞なり。オクル、オコス(起)は派生動詞なり。オコは語幹又語基なり。ツクル(盡)は原生動詞なり。ツクス(盡)は派生動詞にして、ツクは語幹又語基なり。語幹は語根と同様なる職を務む。一語の中に在りて、語根の不明瞭にして、容易く發見し難きときは、其部分を通じて語幹と見做し置くこと安全なるべし。